

5 タマネギの機械移植に適する良質苗生産

はじめに

タマネギの機械移植栽培を進めていくには、慣行苗よりセル成型苗を利用する方が優れていると考えられる。また、機械移植用の苗としては、欠株がないこと、生育が均一であること等が求められる。したがって、ここではセル成型苗による機械移植に適する苗の条件と良質苗の生産技術について述べる。

苗の均一性

機械移植では、苗の取り扱いや収量の安定性から、苗が均一であることが最も重要である。セル成型苗は穴数が多くなると内部は軟弱徒長し、さらに苗が曲がったり下葉が枯れて移植精度が低下しやすい。これを防ぐため、育苗中期～後期にかけて2回程度、草丈20cmに剪葉して葉が込み合わないようにする。

育苗は、苗の本数が多く日数も2か月と長いので、露地で根切りネットを張った上にセルトレイを並べて地中に根を張らせる。発芽後生育の初期に強い雨に当たるとセル内の用土が流され生育が不均一になる。これを防ぐためにトンネル被覆の準備をしておく必要がある。

収量の安定性

セルの大きさについては、200穴、288穴（以上Y社）、448穴（M社）、720穴（I社）のセル穴数の違うトレイで比較したところ、穴数が少なくセルが大

きい方が、地上部重が重く茎径も太い苗になり収量も高くなった（図1）。しかし、穴数が少ないと10a当たりではトレイの数が多くなりコストが高くなることから、セルの大きさは288穴前後が適正と考えられる。晩生種の‘ア

日の播種で11月29日の定植では、苗の地上部重が2g以上、茎径が5mm以上の苗となり6.5t/10a以上の収量が得られた（図2）。しかし、播種時期がこれ以上遅くなると苗が小さく収量も低くなった。このことから、定植日までに苗が目標の大きさに達しないと予測される場合は、早めに、N成分で250ppm前後の液肥を一週間おきに数回施用して苗の生育を確保する。

根鉢の形成

タマネギの根は細根が出ないため根鉢が形成しにくく、移植機が苗をトレイから抜く時に崩れる心配がある。これは、育苗用土にピートモスを混ぜ、繊維と根を絡ませることや、用土を強めに詰めること、さらに移植直前に用土に水を十分含ませることなどによって防ぐことができる。

今後の計画

苗の大きさと収量、抽だいとの関係についてさらに詳しく検討する予定である。

小林 尚司（淡路農技・農業部）

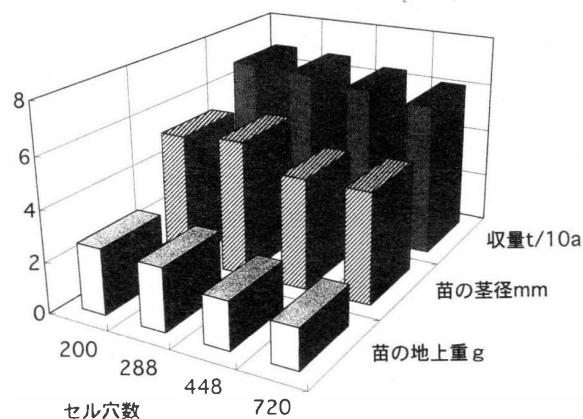


図1 セルの大きさの違いと苗の生育・収量

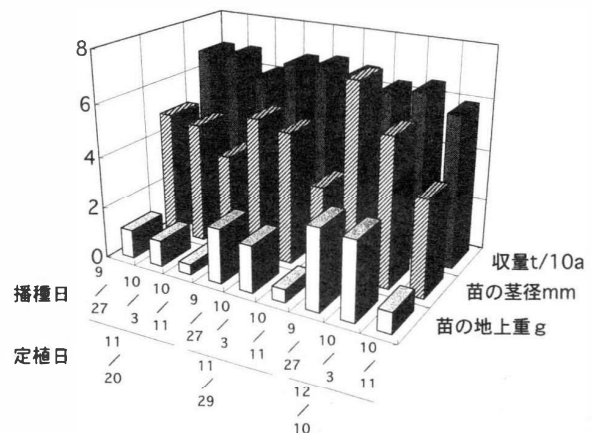


図2 288穴セルによる播種・定植時期の違いと苗の生育・収量